

# 小学校における生成系 AI 活用ガイドライン（教員向け）

（改訂版 2025/2/20）

## 1. はじめに

- **生成系 AI（Generative AI）** は、人間のように文章や画像を生成する機能をもった人工知能ツールです。ChatGPT のような対話型 AI は、児童の自由研究や調べ学習の補助など、多様な教育的可能性を秘めています。
- 一方で、フロリダ州で報告された「児童が AI に深く依存してしまった事例」や、「フェイク画像を生成していじめに用いたケース」、AI の改造版（オープンモデル）による不適切発言など、**心理的・倫理的・セキュリティ上のリスク**も指摘されています。
- 本ガイドラインは、教員が小学校現場で生成系 AI を「**安全・安心**」「**効果的**」「**倫理的**」に活用するための基本方針をまとめたものです。

## 2. AI 活用の前提：教師の専門性と学習指導要領との整合性

### 1. AI は「教育の主体」ではなく、あくまで「道具」

- AI に授業のすべてを任せるのではなく、**教師が目的・範囲をコントロール**したうえで活用することが重要です。
- 「AI=道具、教師=学習をデザイン・ファシリテートする専門家」という立ち位置を常に意識しましょう。
- 特に小学生の場合、「**自分で考える力**」を育む段階でもあるため、AI 任せにせず、子どもの主体的な学びをサポートする補助ツールと位置づけることが大切です。

### 2. 学習指導要領や教科目標との整合

- 生成系 AI は、新学習指導要領が重視する「**情報活用能力**」や「**批判的思考力**」を育む一助となり得ます。
- ただし、「**読む**」「**書く**」などの**基礎的な学習プロセス**を子ども自身が身につける**機会**を奪わないように注意してください。

### 3. 校内研修・情報共有

- AI 技術は日々進化しています。**校内での情報共有や研修**を定期的に行い、事例やトラブルシューティングを蓄積しましょう。
- 地域や教育委員会、大学・企業との連携も有効です。最新動向や安全面の対策を共有することで、リスクを最小化できます。

## 3. 具体的な活用例

以下は、あくまで「一例」です。教科や学年、児童の実態に合わせて検討してください。

### 1. 調べ学習や自由研究のサポート

- 例：子どもが興味をもったテーマについて AI に質問し、**AI の回答+図書・他の資料**を参照してまとめる。

- **ポイント:** AI の答えをそのまま信じこまず、**他の情報源と比較**したり「本当かどうか確かめる方法」を教えると、情報モラルや批判的思考が育ちます。

## 2. 作文や文章表現のブラッシュアップ

- 例：子どもが書いた作文を AI に要約・言い換えさせ、「どこが違うか」「どちらの表現がわかりやすいか」などをクラスで議論する。
- **ポイント:** 書き手（児童）のオリジナリティを尊重し、AI の提案はあくまで「参考例」。コピペ防止のため、文章の出どころや著作権にも留意します。

## 3. 教材作成・校務の効率化（教師向け）

- 例：学級通信やお便りの文例、学習プリントのアイデアを AI に相談する。
- **ポイント:** 個人情報や機密情報を入力しない。**誤情報や不適切表現がないか教員自身が最終チェック**する必要があります。

# 4. リスクと注意点

## 1. 誤情報や不適切表現

- AI はデータの偏りや学習内容の欠陥により、まちがった内容や不適切な表現を出す場合があります。
- 児童には「AI の答え＝絶対正しい」という思い込みを与えないよう指導し、「フェイク画像・動画が作られる可能性がある」ことも含め、注意点を教えましょう。

## 2. 児童の心理的影響・依存リスク

- フロリダ州の例などで、AI に依存しすぎて不安定になる子どもが出たケースがあります。
- AI には「心」がないこと、人間同士のコミュニケーションが大切なことを繰り返し周知。
- 児童が AI とのやり取りで不安を感じたときに、いつでも教師や保護者に相談できる環境を整えてください。

## 3. いじめ・悪用

- 子どもが AI を使って誹謗中傷や差別的表現を生成・拡散する恐れがあり、フェイクコンテンツがはじめに利用されるリスクが高まっています。
- 定期的に情報モラル教育を実施し、問題が起きたら早期に把握・対応する仕組み（教員間・管理職・保護者間の連絡体制）を整えましょう。

## 4. 個人情報や児童データの取り扱い

- 生徒名・住所・成績など、個人を特定できる情報を AI に入力しないよう徹底が必要です。
- とくに「オープンモデル」と呼ばれる改造版 AI は安全フィルタが弱い場合もあり、データが流出する危険が高まるため、学校側で使用ツールを限定・管理することが望ましいです。

# 5. トラブル事例と早期対応

## 1. AI に丸写しした課題提出

- 調べ学習などで児童が AI の回答をコピペして提出し、中身を理解していない可能性があります。
- **対応策:** 授業での口頭発表や途中メモ、思考プロセスを評価する仕組みを作る。
- どこまでが「自分の意見」か明確になるよう指導し、再提出を求める基準を学年・学級で共有します。

## 2. 児童が不適切な文章・画像を生成した／された

- AI を使った暴言や誹謗中傷、フェイク画像によるいじめなどは早期介入が必要。
- **校長や教頭、スクールカウンセラー、保護者と連携**し、被害児童のケア・加害児童への指導を行います。

### 3. AI チャットボットで子どもが不安を感じた

- 「AI の言葉が怖かった」「自殺を勧められた」などのリスク例が海外報告にあります。
- 児童の様子がおかしいと感じたら早急に聴き取りを行い、**必要に応じて医療機関や専門機関へ相談**する体制を用意してください。

## 6. 指導のポイント

### 1. 多角的な学習体験をデザインする

- AI だけでなく、図書館や地域の人々とのふれあいなど、さまざまな情報源・学習方法を組み合わせ、批判的思考や探究心を伸ばします。

### 2. 「AI の回答を検証しよう」演習

- わざと AI に質問して、どう間違うのか、どう歪むのかを児童と一緒に分析する活動は、**情報リテラシー**向上につながります。
- 間違いがあったとき「どう直せばいいか」「なぜ間違っているのか」を学ぶことで、子どもの主体性が育ちます。

### 3. 評価方法の工夫

- 作文や調べ学習の提出物だけでなく、**過程（下書き・メモ）**や口頭での説明を評価に含める。
- 児童が AI をどのように使ったか、オリジナルの思考がどのように入っているかを把握しやすくする仕組みを作ります。

### 4. 教師自身のスキルアップ

- 教師自身が生成系 AI を試し、どのような誤回答やフェイクが生まれるか把握しておく、児童指導がしやすくなります。
- 校内研修や分担しての情報収集など、**教師同士で学び合う**体制を構築し、問題発生時にも迅速に対処できるようにしましょう。

## 7. 保護者・地域との連携

### 1. 保護者説明会・連絡

- 学期の初めや保護者会で、「AI を授業でどのように使う予定か」「リスクは何か」を周知します。
- 家庭での利用ルールや困ったときの相談先も提示すると、保護者の不安を軽減できます。

### 2. 地域専門家・高専・大学との連携

- 地域の ICT 企業や大学研究者などに協力を仰ぎ、最新動向や教育活用の実践事例を学ぶ機会を設けると良いです。

### 3. 相談フローの整備

- 児童が AI でトラブルに巻き込まれたり、心理的な問題が起きた場合に備え、**保護者への連絡やスクールカウンセラーとの連携方法**をあらかじめ決めておきます。

## 8. 今後の展望とガイドライン更新

- 生成系 AI は新しい技術であり、進化も非常に早い分野です。海外を含む各地で様々なガイドライン・事例が出てきています。
- 日本でも文部科学省や自治体が、学校現場での AI 活用に関する指針を逐次アップデートしており、**ガイドラインは定期的に見直しを行う必要があります。**
- **校内や教育委員会レベルで、年 1 回程度**は本ガイドラインを更新し、トラブル事例や成功事例を反映させる仕組みをつくとよいでしょう。

### まとめ

小学校での生成系 AI 活用は、**子どもの好奇心を刺激し、学習の幅を広げる可能性があります。**しかし、**誤情報・依存リスク・いじめへの悪用・個人情報漏れ**などの注意点を踏まえ、教師が適切にコントロールすることが不可欠です。

- 「**AI に使われるのではなく、AI を道具として使いこなす**」という姿勢を、教師自身が示し、子どもに伝えていくこと。

- 保護者や地域とも協力しながら、**安心して学べる学習環境**を整備すること。

これらを意識しつつ、**児童の健全な発達を最優先に**、生成系 AI の持つメリットを上手に活かしていきましょう。